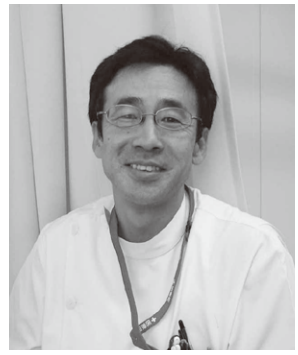
市民病院発

ほのか診察室

問 市民病院総務課　TEL 23 - 7852

シリーズ第61話

慢性肝炎について



市民病院
消化器科・外科診療部長
横井　佳博

毎年7月28日は「日本肝炎デー」です。肝炎検査を受けましょう。

肝臓は、体の中で最も大きく、およそ2500億個の細胞で構成され、血液の解毒や栄養分の貯蔵などの機能を担っています。慢性肝炎は、肝臓の細胞が長期間にわたり持続する炎症によって壊れる病気です。次第に肝臓に線維が増加して肝硬変となり、肝がんを合併する場合もあります。しかし、慢性肝炎に特有の症状はなく、気が付かないうちにかなりの重症になっていることもあります。

診断方法

慢性肝炎の診断は、血液検査により行われます。血液検査により肝臓障害が疑われる場合は、その原因を明らかにする必要がありますが、わが国における慢性肝炎の約90％が肝炎ウイルスの感染によるものです。したがって、肝臓障害が疑われるときは血液中のB型肝炎ウイルス抗原（HBs抗原）とC型肝炎ウイルス抗体（HCV抗体）を調べます。HBs抗原が陽性であればB型慢性肝炎、HCV抗体が陽性であればC型慢性肝炎である可能性が極めて高いと言えます。

慢性肝炎と診断されると、超音波検査などの画像検査で肝臓の形などを観察します。さらに、診断を確実にするために肝生検も行います。肝生検とは、小さな針を肝臓に刺し、肝臓のごく一部を採取して顕微鏡で直接観察する検査です。しかし、肝生検には一泊二日の入院が必要ですので、患者さんによってはできないこともあります。その場合には血小板数や超音波検査などから、慢性肝炎の程度（軽度、中等度、高度）や肝硬変に至っているか否かを推定します。

治療方法

慢性肝炎は、適切な治療と健康管理を行えば、肝硬変への進展や肝がんの発生を防ぐことができます。肝炎ウイルスにはB型とC型がありますが、いずれの場合にも肝炎ウイルスに対する薬物療法が最も重要です。

B型肝炎ウイルスに対する抗ウイルス薬は、一日一回の内服で肝臓のウイルス量を減少させる効果があります。これによりウイルスが完全に駆除されていなくても、血液検査の結果が正常値に戻ることもありますが、服薬は必ず医師の指示に従い続けるようにしましょう。治療途中で服薬をやめてしまうと、ウイルスが急に増えてしまい、重篤な肝炎が起こる場合がありますので大変危険です。

C型慢性肝炎の治療では、ウイルスを肝臓から排除することが重要です。ウイルスが駆除できれば、肝硬変への進展が抑えられ、肝がんの発生率も10分の1程度に減少させることができます。ウイルス駆除に効果的な治療法がペグインターフェロン・リバビリン併用療法（またはペグインターフェロン単独療法）であり、一週間に一回の皮下注射と毎日の内服をウイルスの型によって24週から72週施行します。発熱や発しんなどの副作用が出やすいという問題がありますが、世界で最も進んだ治療法です。従来の治療法では治すことが難しかった患者さんについても、この治療法により、多くの方が完治するようになりました。